

昨年放送されたNHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」ではやや破天荒な義経が演じられていたようだが、日本人で史上最高にして最も愛されているヒーローの一人といえば「源義経」だ。日本には古来判官鼻肩（ほうがんびいき）という言葉がある。この意味は、第一義には人々が源義経に対して抱く、客観的な視点を欠いた同情や哀惜の心情のことであり、さらには「弱い立場に置かれている者に対しては、あえて冷静にならずに、同情を寄せてしまう」心理現象を表している。判官（はんがん）とは朝廷の官位で、源義経が授かっていたものである。また判官鼻肩という語は室町時代末期から江戸時代初期にかけて成立したとされる。特に当時の江戸っ子にとって、源義経は日本におけるスーパースターの草分けであり、それが今でも続いているようだ。

義経は1189年岩手県平泉町で庇護者である藤原泰衡に攻められ、最後は火を放った持仏堂に籠もり自害したというのが通説になっている。しかし義経は生きていた。そして三陸沿岸を北上し、八戸、青森を経由して津軽半島から蝦夷地に渡り、はては中国大陆に渡って大蒙古帝国の祖であるジンギス・ハーン（成吉思汗）になった。これが俗にいう義経北帰行伝説だ。悲劇のヒーローである義経が実は生きていたというストーリーがいかにも日本人好みの設定で知らない人はいないほど有名な伝説のひとつで、今でも信じる人が多いといわれている。そしてその足跡が今でも岩手県をはじめ、青森県や北海道に残っている。



【義経北帰行ルート】

では、義経は史実の通り本当に自害して死んだのであろうか？この点に絞って考察した人が多くいる。そのポイントを絞って解説すると①義経は当時戦略家として名が通っていた。が本当に自刃したのであろうか？平泉での危機を察知できない凡庸な義経と、百戦錬磨の義経が同一人物だとは考えにくい。実は死んだのは義経の母方の従兄弟にあたる杉目太郎行信だったという話だ。この杉目は昔から義経の影武者だったとされていて、宮城県金成町に「源祖義経神霊見替」と書かれたお墓が立っていて、当地では義経の身代わりになって死んだという言い伝えが語り継がれている。②頼朝の首実検 義経は旧暦四月三十日に衣川で自刃し、首は酒に浸けられて死後43日もかかって鎌倉腰越浦に運ばれている。当時平泉から鎌倉までは二週間あれば着くことが出来た。泰衡も頼朝の命に従って義経を討ったのなら、一刻も早く首を送り届けたい筈なのに、遅すぎるのである。旧暦の五、六月といえば真夏。いくら酒に浸けられたとはいえ、腐敗はかなり進む。さらに焼き首である。恐らく義経の顔と見分ける事などできようもない。また頼朝も母の法要と称して、首の鎌倉入りを延ばしている。最終的には頼朝は義経の首を確認しないで海に捨てさせてし

まったようだ。このことから頼朝は義経の首などどうでもよかったのではないか。③二万もの泰衡軍 義経討伐の泰衡の軍勢を見ると、なんと二万である。義経は郎党十人程度と言われている。いくらなんでも二万は多すぎる。鎌倉に向けたデモンストレーションではないか？ という説だ。それに頼朝が求めていたのは、義経の生け捕りである。それなのに泰衡の襲撃方法は、いかにも、わざと判別不能な焼け首を作ろうとする意志さえ感じてしまう。殺すにしても、毒殺とかいくらでも他に方法があったはずであり、そうすれば、焼け爛れない「義経の首」を鎌倉に送ることができたのだ。④義経蜂起騒動 奥州征服の半年後、「義経蜂起」の誤報に鎌倉幕府は浮き足立つ。義経の死が確実ならば、このような事態には陥らない筈である。鎌倉



【中尊寺所蔵の義経像】

が義経生存を知っていたのではないかと考えられる。⑤義経北帰行の足跡 義経が生きて逃避行したという痕跡が岩手から青森にかけて多く点在している。⑥主君を見捨てた裏切り者とされる常陸坊海尊 海尊は北行ルートを確保する交渉人兼案内人の役割を受け持つ水先案内人だったのでは？ いかにも百戦錬磨の義経といえども、北上山地の懐深くいきなり分け入るのは危険すぎる、先行部隊として北帰行ルートの確保を受け持ったという事だ。⑦頼朝側の狙い 義経が北へ逃げたという情報があっても、義経はもはや死に体である。知らぬふりをして平泉を攻め落とせる。欲しいのは奥州。はなから義経の命など口実でしかなく、義経と名乗るものを形だけでも殺してしまえばそれでいいのである。これらが義経北帰行伝説の所以である。

源義経は実は生きて北に逃げ延びた。まさに歴史のロマンである。そして岩手や、青森には、その痕跡を巡るツアーコースまで設定されている。北帰行説では、義経一行は、平泉から住田町、遠野の笛吹峠を経て大槌町、宮古市、久慈市、八戸市、青森市、十三湊から北海道に渡ったことになっている。例えば遠野にある義経の痕跡をいくつか紹介しよう。まずは「続石」である、これは以前風土記で紹介したように、弁慶が石を積み上げたという伝説である。次いで「風呂」という屋号の家がある。これは義経一行に風呂を沸かして入浴させてことに由来する屋号であると言われていた。また笛吹峠麓のとある民家の裏に小さな祠があり、そこに祀られているのは乗馬姿の人形で、義経の像だと伝えられていて、その民家の守り神として代々祀られているという。このような言い伝えが三陸沿岸の神社仏閣などに多く残されている。

さて、今回は岩手の中でも義経の痕跡が最も多く、3年以上も隠れ住んでいたとされる、宮古市を訪れた。宮古には数多くの義経の痕跡や言い伝えが残されている。「鈴ヶ神社（すずがじんじゃ）」は、義経の愛妾・静御前の屋敷跡で、難産の末、命を落とした静御前をしのび建立されたと伝えられている。「日向日月神社（ひな

たにちげつじんじゃ)」は義経一行が参拝した神社と言われ、義経と静御前との間に生まれた子とされる佐々木四郎太郎義高が祀られている。「判官稲荷神社（はんがんになりじんじゃ）」は、黒森神社に潜伏していた義経一行が状況偵察のため訪れた神社で、一行が黒森神社を後にする際に甲冑を埋めた地とも伝えられていて、義経が祭神になっている。「横山八幡宮（よこやまはちまんぐう）」は、義経一行が参詣に訪れ、宿泊したとされる神社。家臣の一人、鈴木三郎重家は老齢のためここに残り、

名を重三郎と変えて横山八幡宮の神主となったと言われている。「黒森神社（くろもりじんじゃ）」は、古くから漁業・



【黒森神社参道】



【黒森神社本殿】

交易を守護する神社として信仰されていて、黒森神社のある黒森山は、その名が示すように、山が巨木に覆われ、うっそうとして「昼なお暗い山」だったという。義経一行は3年3ヵ月にわたって黒森山に籠もって行を収め、般若経600巻を写経して奉納したと伝えられ、「黒森」は、義経の「苦労森」から転じた名であると言われている。「久昌寺（きゅうしょうじ）」は源氏の一族である源義里がここに館を構えていて、義経一行が立ち寄ったと言われている。久昌寺には、義里の妻・源氏御駒から奉納されたとされる鰐口（仏堂の正面軒先に吊り下げられた仏具の一種）が残されている。

この中で「判官稲荷神社」と「黒森神社」を実際に巡ってきた。最初に「黒森神社」を訪れた。宮古の「魚菜市场」からさらに100mほど進むと大きな看板が出ているのですのですぐにわかる。看板を右折して山に入っていく感覚的にはかなり山奥に分け入った感じであった、黒い森というとドイツのグリム童話の舞台となった「シュヴァルツヴァルト（黒い森）」を思い出すが、とにかくうっそうとした山奥であった。この黒森神社はいつ頃建立されたかは定かでは



ないが、発掘調査により奈良時代（8世紀）のものであるとされる密教法具が出土したことからそれ以前に建立したものと思われ、古代から地域信仰の拠点であった事が伺える。またこのことにより義経が潜伏したことについての時代考証は整合性がとれることにもなる。次に訪れたのは判官稲荷神社である。場所は小高い山頂のような場所にあった。すぐ隣にあるある常安禅寺に車を停めさせてもらった。そこから歩きで

【判官稲荷神社参道】



【判官稲荷神社本殿】

写真の参道に行き、そこから急な階段を上ってやっとたどり着いた。ここは義経一行が偵察のため訪れた場所で、確かに宮古の街の状況が見渡せる場所になっていた。この神社の御朱印は有名らしいが、常時発行しているわけではなく、期日指定でもらえるようで、希少価値が高そうである。このように義経の痕跡がいくつも残っていると、本当に義経は生きて北帰行したと疑う余地がなくなってしまうのは筆者だけであろうか。

宮古にはまだ多くの痕跡が残っている。静御前が伝えたと言われる踊りや、義経が寄贈したと言われる義経像や仏像など多くのなぞに包まれた痕跡が存在している。なぜ三陸地方に義経伝説が伝承されているのか、本当に不思議である。実際に訪れてみて、何か得体のしれない憑き物が乗り移ったような感覚に陥ってしまった気がする。そしてこのような痕跡が、三陸沿岸を八戸まで続いていて、八戸から今度は西に移動して十三湊までの青森ルートになっていく。竜飛岬にも「義経寺」という義経の痕跡が残されていた事を思い出した。このような歴史ロマンを求めて駆け巡るのも、また一興かと思う次第である。皆さんも三陸沿岸にある義経の痕跡を巡って、義経の息吹を感じてみませんか？

参考資料

NHK BS プレミアム 新日本風土記スペシャル「義経の旅」

公益社団法人 能楽協会ホームページ <https://www.nohgaku.or.jp/journey>

コラム 義経北帰行伝説の足跡を追う歴史ロマンあふれる旅「岩手編」

大人のための情報紙 シニアズ

高橋政彦著 風のうわさ 義経北帰行伝説、常陸坊海尊、忠衡の野望

宮古市ホームページ 歴史文化 義経北帰行伝説

https://www.city.miyako.iwate.jp/kanko/yositsune_densetsu.html

さんりく旅するべ ～いわて三陸観光ガイド～

義経北行伝説パワースポットめぐり＜宮古市＞

<https://sanriku-travel.jp>